

イチゴの生物農薬チリカブリダニ製剤によるハダニ類の防除

園芸試験場

1 取り上げた理由

本圃定植後のイチゴのハダニ類防除対策として、生物農薬であるチリカブリダニ製剤の効果について検討したところ、実用性があり、さらに薬剤の散布回数を削減できる可能性が高いことから、参考資料とする。

2 参考資料

1) 種類名 チリカブリダニ製剤2種

a 商品名 スパイデックス, トモノカブリダニPP

b 学名 *Phytoseiulus persimilis*

c 製剤 500mlのポリエチレン瓶

d 含有量 1瓶あたり緩衝剤のバーミキュライトとともに2,000頭

2) 対象病害虫

a イチゴ ハダニ類

3) 使用方法

a 使用時期：ハダニ類発生初期

b 使用量：2,000株～3,000株に500mlを目安とする。

圃場の条件により、使用回数や量を加減する。

c 使用方法：イチゴの葉上に、バーミキュライトとともに散布（放飼）する。

ハダニの発生にムラがあるときは、発生部分に多く散布する。

3 利活用の留意点

1) ハダニ類を捕食する天敵チリカブリダニを含有する製剤であり、常温では生存期間が短いので、入手後は直ちに使用する。使用に際し、容器内でチリカブリダニが偏在していることがあるので、散布前に瓶を横にしてゆっくりと回転させ、バーミキュライトと均一に混和してから放飼する。

2) ハダニ密度が高くなってからでは十分な効果が得られない場合があるので、放飼はハダニ類の発生初期に行う。放飼時期が遅れた場合は、チリカブリダニに影響のないオサダン水和剤やニッソラン水和剤等で、あらかじめハダニの密度を低下させておくとよい。チリカブリダニを圃場に定着させ安定的な効果を得るために、ハダニやチリカブリダニを注意深く観察し、放飼後にハダニの増加が認められたり、チリカブリダニの定着が認められなかったりしたときは追加放飼するか、薬剤による防除に切り替える。

3) 暖房設備のあるハウスでは夜温は高めに設定する。無加温の場合、厳冬期の効果は期待できないので、使用は3月以降が望ましい。また、チリカブリダニは比較的高湿度を好むので、ハウス内湿度が低くなりすぎないように（75%以下）注意する。

（問い合わせ先：園芸試験場環境部 電話022-383-8132）

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

新規発生病害虫の発生生態と防除技術確立に関する試験
(平成10, 11年)

2) 参考データ

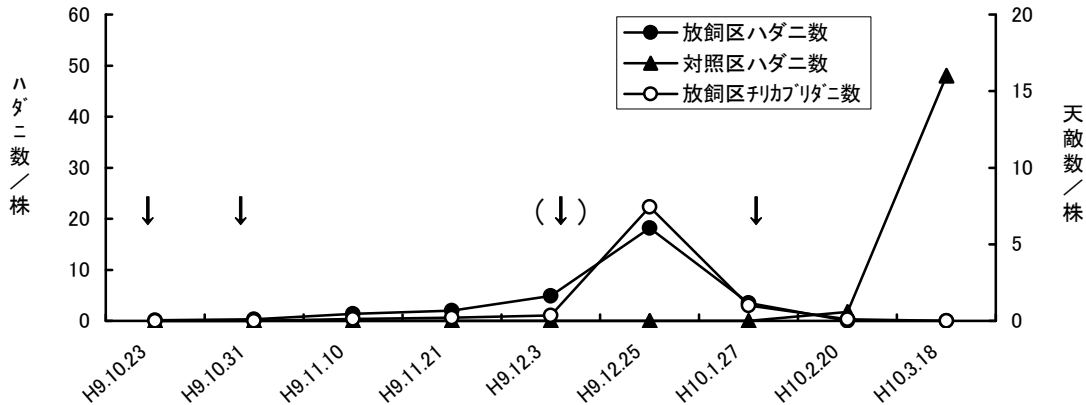


図-1 イチゴのハダニ類に対するチリカブリダニの効果(現地試験, 1997年~1998年)

天敵放飼↓: 10月23, 31日は10aあたり1本, 12月11日はつぼ発生部分に1本,
1月27日に10aあたり3本(全面2本, つぼ1本)

対照区は開花前に殺ダニ剤を1回, 1月下旬以降6回散布した。

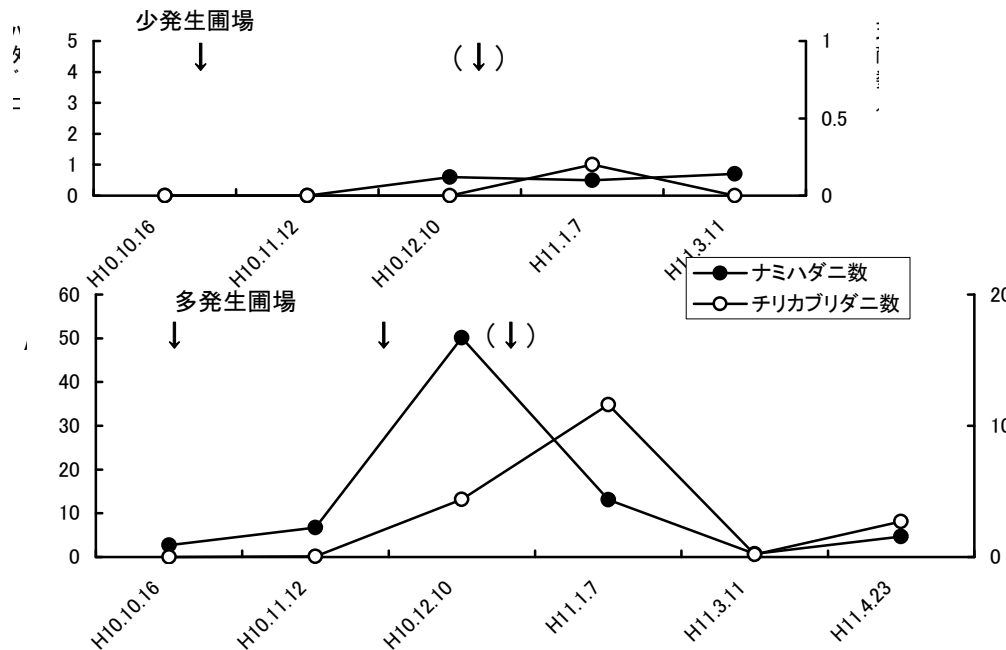


図-2 イチゴのハダニ類に対するチリカブリダニの効果(現地試験, 1998年~1999年)

少発生圃場は10月23日に10aあたり3.5本, 12月17日につぼ発生部分に0.5本放飼。

※本製剤の価格は500mlで6,000円前後
包装単位は500mlの1種類

3) 発表論文等

なし

